

内村鑑三における「神・人・自然」

原 島 正

序

宗教思想は、神観を中核とする。問題はその神が、人ないしは歴史とどのように関わるか、さらには、自然とどのように関わるかである。この「神・人・自然」の関わりが宗教思想の特色となる。本論は内村鑑三の宗教思想を説明することの一部であるが、とりわけ「神・人・自然」がいかに関わるかに焦点をしばって考察する。したがって内村鑑三の宗教思想の特色を明らかにすることになる。^①

ところで「神・人・自然」の関わりは、三つのパターンが考えられる。^②

第一は、神対 へ人・自然である。このパターンでは、神と へ人・自然は明確に区別される。神は創造者であつて、へ人・自然は被造物である。この型は神が へ人・自然の外にあるか、それとも神が へ人・自然の内にあるかによつて細分される。

第二は、へ神・人 対自然である。人は「神の似姿」に造られ、自然を管理する責任を委託された。

第三は、〈神・自然〉対人である。このパターンは汎神論に近い考え方であるが、人は自然を通して神を知る。そして、墮落は人だけの世界であり、自然は墮落を知らない。それ故、自然と文明、田舎と都会が対比され、価値は前者すなわち、自然と田舎にある。内村鑑三にみられるパターンである。

この「神・人・自然」のトリオは、神の救済方法として、次の二つに分けることが出来る。

第一は、自然を媒介とする人の救済であり、先の三のパターンと結びつく。

第二は、自然を媒介としない人の救済であり、先の一のパターンと結びつく。救いは、直接神から与えられる。しかし、この二つの救済方法は、相対立するものではなく、人と自然を救おうとする神の愛と自由において一つである。神はあるときには、自然を通じて人を救おうとされる。あるときには、直接人を救おうとされる。とくに自然は必ずしも人に恵みをもたらさない。自然は、人に残酷である。したがって、自然に恵みを見出すことが出来ない。その場合「自然の法則」とは別に「神の法則」すなわち「愛の法則」があり、人の救いはその「愛の法則」による。内村鑑三はこのようにも考えている。

この二つの神の救済方法は、人の自然体験が背後にある。たとえば、砂漠地帯のようにいつも自然と闘いつつ生活している人たちにとっては、神の救いは自然の外にある。同時に自然の雄大さは、神の偉大さ、そして人の小さいことを人に示す。

他方、風光明媚なところで生活している人たちにとっては、自然を通じて神の救いを知ることになり、自然の美しさは、人間の汚れを自覚させることになる。

以上の「神・人・自然」の三つのパターン、ならびに神の人を救済する方法に関する二つのパターンを前提に内村

鑑三の宗教思想を考察する。内村の文章には、「神・人・自然」の関係について、矛盾した考えが示される。以下、その矛盾を矛盾として、内村の考え方を見ていくことにする。

一

内村は一九一〇年二月と一九二九年八月にほぼ同じ内容の論文を書いている。内村にしてはめずらしく順序だてて書かれているので、その二つの論文を紹介し、内村における「神・人・自然」の関係を考察することにする。

まず一九一〇年の「神に関する思想」を紹介する。⁽³⁾内村によれば、「神に関する思想は数限りない、然れども之を左の二種に大別することが出来る」という。

第一、無神論

第二、有神論

内村はこの有神論を次の三派に分ける。

(A) 自然神教(デイズム) (B) 万有神論(パンシーズム) (C) 唯一神論(ゼノセイズム)

まず、第一の無神論について内村は次のように述べる。「無神論とは読んで字の如く神は無いと云ふ説である、即ち万物の起原と其持続とを神(靈)以外の力に帰せんとする説である」。このように内村は無神論を定義する。つまり、内村によれば、「無神論は物を先にして靈を後にするより起る説である」が、「人自身が靈的実在者であるが故に、彼に由て絶対的無神論の唱へられんことは不可能である」。

このように内村は、神の存在証明を「人が靈的存在である」ところに見出している。「神の在る第一の証拠は供各自に靈魂の在る事でありませぬ」(「神の存在の証拠」一九二五年六月)。

内村によれば、人は靈肉をそなえた存在である。人が靈的存在である限り、神は存在する。そして救いは先ずこの靈的存在としての人において実現する。そしてその救いは靈の世界で「既成の事実」である。けれども、人は身体的存在であり、自然に属している。したがって、身体的存在としての人の救いは「未だ」実現しておらず、「宇宙の完成」のときまで、待たなければならぬ。神はまず靈的存在としての人を救い、最後に宇宙万物の救いとともに、身体的存在としての人を救う。キリスト教は靈魂不滅ではなく、身体よみがえりを信じる。しかし、そこには「内から外」という順序があると内村は考えている。

いづれにしろ、内村にとって人が靈的存在であることは、前提とされており、人が靈的存在である以上は、神の存在は疑うことが出来ないのである。それではその神はどのようなにして在るのであろうか。その問題の解決如何によって有神論はいくつかの派に分かれる。

A 自然神論——神を宇宙の外に置く。

「神は有る。宇宙は彼に由て造られたに相違ない、然し神の造りし宇宙は完全であるが故に彼が今之に干渉する必要はない、恰かも大機械師に由て作られたる機械の如く、宇宙は神の手を離れて以来自働的に運轉する者である、……神は今宇宙と人世とを離れて其外に立ち給ふ、而して天然と人類とは独り自から其賦与せられし法則に従ひ、其定められし目的に向て進む」。

この神観は言うまでもなく、イギリスを中心に十七世紀から十八世紀にかけて流行った「理神論」(Deism)のそれで

ある。神と宇宙との関係は、時計とそれを作った人との類推で説明される。時計を作った人は存在する。しかし、今時計は、その定められた法則に従って動いている。それと同様に自然は神によつて造られたものであるが、神から離れて自動的（オートマチック）に動いている。「神は機械師であつて宇宙は完全なる機械である」と内村は述べる。

B 万有神論——神を宇宙の中に留める。

「宇宙は神と同体にして彼を離れて寸時も存在し得る者にあらず」。

内村によれば、神を余りに遠くに離してしまつたのが、自然神教であり、神を敬して遠ざける危険がある。それについて、神を余りに近く引き寄せたのが万有神教であり、神に狎なれてこれを軽んじる傾向がある。それに対して唯一神教は、「自然神教と万有神教との間に立て、二者の真理を綜合する者である」。

C 唯一神教

「宇宙は神の造りたる者である、而して神は今猶ほ宇宙の中に在りて造化の活動を継げ給ふ」。

神は天然に対して内であり、外である。内であるとは、神は宇宙の中にあつて働き給うからであり、外であるとは「宇宙は大なりと雖も神は宇宙よりも大である」からである。

「我等は草と虫とに於いて神の力を見る、然し神自身を觀みない」のである。「神は宇宙を綜合したる者ではない。彼は其れ以上である」。神は宇宙の兄弟ではなく、父であり、友である。そのように見て「彼を完全に解とけることができさる。

それではこの唯一神教において人はどのような位置にあるのであろうか。

「宇宙は未だ完全なる者ではない」、神と宇宙を同一視することはできない。「之を完成するの職分を神は人に委

ね給ふたのである」。そのことは「人自身が神の性を佩^おびて無限的であつて宇宙以上である」ことを意味する。

ここに「神と人」対自然という第二のパターンを読み取ることが出来る。そして救いは自然を媒介とせず直接神から来る。つまり、内村によれば、「天然は神の作である、然れども未だ神の理想に達したる者ではない、人は神の子である、故に天然よりも遙かに神の理想に近き者である、故に人は直に神に学ぶべき者であつて、天然に学ぶべき者ではない、神の生み給へる一子に於て神を瞻^{かん}とせずして、天然に於て彼を見んとして、人の倫理的感覚は鈍らざるを得ない」。ここに倫理の問題がでてくるが、万有神教には大きな欠点がある。それは「明白に善悪を区別することが出来ない事である、若し万有が神の完全なる自顕であるならば、其悪事も亦神の行為である、而して万事を天然より学ぶに至て、人は必然的に天然まで墮落する」と内村は述べる。そして「所謂『自然主義』を唱えて耻とせざる」いまの日本人の墮落は皆ここに基づくといふのである。そのことはともかく、人は「此宇宙に在て此宇宙の属ではない、彼は神の属である、故に宇宙を通してのみならず、又直に、……神と交通する者である」。

以上一九一〇年二月に発表された「神に関する思想」にみられる「神・人・自然」の關係を紹介した。⁽⁶⁾

二

次に、約二十年後に書かれた同題の「神に関する思想」を紹介する。両者はその論旨において変わつていない。⁽⁷⁾
「神に関する思想に様々あるが、之を左の四種に大別することが出来る。

第一 無神論 Atheism. 不可思議論 Agnosticism.

第二 自然神教 Deism.

第三 汎神論、万有神教 Pantheism.

第四 有神論 Theism.]

不可思議論が今回加わっている。「是はハッキリと神は無しとは云はない、有る乎も知らないが知るべからずと云ふ。人間には神と云ふが如き現象界を離れたる者を知るの能力なしと云ふ」。「問題は認識論のそれである。そもそも「識る」とは何ぞやとの問題である」。このように内村は述べる。

第二の自然神教については、次のように内村は述べている。

「神は天然の理であり宇宙の原因である。故に道理を以て天然を-throughして探り求むべき者であると唱ふるが自然神教である」。そして第十八世紀の学者政治家の宗教は大抵自然神教であると言ふ。その一人として詩人ワルズワスの「天然を-throughして天然の神に到る」という言葉を大文字で紹介している。そして内村はその意味において「凡ての基督信者が其信仰の一面に於て自然神教信者である」と言ふ。

内村にとつて、天然は「神が御自身を現はさんとて造り給ふたる者で」あり、「第二の聖書」であつた。

第一の聖書と第二の聖書の違いは、直接に神の聖旨を伝えるか、間接に伝えるかだけであり、聖旨を伝える、ということでは同じである。

「天然は第二の聖書である。第一の聖書は直に聖旨其物を伝へ、第二の聖書は覚官を-throughして間接に同じ聖旨を伝ふ。神の律法と天然の法則とは其根本に於て一ツである」。

〔神に関する思考 神と天然〕一九二二年十二月⁽⁸⁾

「第二の聖書なる天然は縦し第一の聖書程明確と、深刻に父を示さずと雖も、然し乍ら深く天然を解して其内に父なる神を發見せざるを得ないと思ふ」。

〔神に関する思考 父なる神〕一九二二年十二月⁽⁹⁾

ここにへ神・自然と対人というパターンをみる事ができる。自然と神とが同列に並ぶのである。しかし、神が自然の内にあるのではない。それ故に内村は次のように言う。「神に関する思想」にもとる。

「自然神教を以つて我が信仰の全部と見ることは出来ない。神は単に造物主でない、万物を造りて今は天の高きに在して遙かに其發達を見て楽しみ給ふ者でない。彼は今も猶ほ万物の内在に在りて働き給ふ者である。神学の言辞を以つて云ふならば『神は emanent 外在し給ふのみならず亦 immanent 内在し給ふ』である」。

この神の内性を強調したのが汎神教である。汎神教では、「神と宇宙との関係は造物主と被造物との関係に非ず、靈と肉との関係である、そして靈肉共存して人が有るが如くに、神は宇宙の別名なるに過ぎない」のである。したがって、「神を試験管の内に見ることが出来ると云ふのである。スピノザの汎神の哲学が今や理化学の実験として現われたと云ふのである」。けれども、「汎神教の欠点は哲学的組織として余りに完全なるに在る。神を万物に於て見て、万物の価値が上ると同時に神の価値が下るのである」。「凡ての物に於て神を見て、神は無きに等しくなる。汎神教の自然の結果は無神論と異ならない」。

このように汎神教では、へ神と自然とが、等しくなってしまう、神は自然の内に取り入れられてしまう。それに対して第四の「有神論は神を人格者として見る見方である」。そして「人は万物の靈であれば、神は靈以下の者であつて

たということに内村は気がつかされたのである。

同じ年の四月、内村は「二ツの神」という文章を書いている。⁽¹²⁾

「神は一ツではない、二ツである、天然の神がある、黙示の神がある、二者は同じ神であつて又別の神である。天然の神は残酷の神である、無慈悲の神である。……之に反して黙示の神は恩恵の神である、慈愛の神である、イエスキリストの御父である」。

問題は「如何にして二者の調和を計らん乎、人生最大の問題は是れである。神は果たして二ツである乎」である。内村にとつてルツ子の死は彼の信仰の躓きであつた。信仰の試練でもあつた。この問いは、その試練によるものであることは言うまでもない。この問いに内村は、次のように答える。

眼に見える天然の神は是れ眞の神ではない、天然の神は顔貌である。したがつて、その心ではないのである。神は偉大である。その顔貌は醜い。しかしその心はその顔貌とは正反対に優しいのである。つまり心と顔とは正反対なのである。そして信仰とはその醜き顔に美しき心を認めることだと言ふ。そのようなことが私たちに可能なのだろうか。ルツ子の死は、内村にとつて天然の醜き顔を直視せざるを得なかつたことを意味する。その奥に神の心を探ろうとした内村の必死の思いがあつた。そして内村は言う。「見ゆる天然を排して見えざる眞の神を認め得て、我等は眞理に達し得たのである、神は天然といふ醜き顔を以て現はれ給ひて人の心を試し給ふのである」。このように述べ次のように結論する。

「二ツの神はやはり一ツである、深き矛盾を以て深き自己を顕はし給ふ讃むべき一つの神である」。

神は直接、自然を媒介としないで私たちに恵みの神を示してくださるのである。その恵みの神こそがイエス・キリ

ストである。キリストを知って自然の眞の意味も判ると内村は言いたいのだろう。

そのことと関連して内村は、天然の法則と愛の法則とは違ふと言う。内村は一九一二年に「愛の法則」と題する論文を書いている。そこで次のように述べる。¹³⁾

「天然の法則あり、社会の法則あり、倫理の法則あり、而して又愛の法則あり、而して神は人を救ふに愛の法則を以てし給ふ、天然又は社会又は倫理の法則を以てし給はず」。

さらに、内村は一九二七年の「イエスキリストの父なる神」では四つの神について述べている。それは神が人類に御自身を顕わされた歩みでもあった。¹⁴⁾

第一、「神は初めに御自身を能力の神として顕はし給ふた」。能力の神とは、天然に由て人が知る神である。この神は必然性の法則を以て働き給う強き無限大の神である。この神は、能力としての神である。

第二、「神は御自身を道理の神として顕はし給ふた」。したがって、この宇宙は偶然の産物ではなく、合理的な機械である事が解るのである。この神は、法則としての神である。

第三、「神は御自身を正義の神として顕はし給ふた」。したがって、人は天然の一部であるが彼の内に天然でないものがある。それは道義的性質を帯びた良心である。この神は正義としての神である。

第四、神は我等の主イエスキリストの父なる神、慈悲の神、愛の神である。

「愛は正義を包容し之を透徹して其目的たる罪の赦しを実行する」。「愛の在る所に自由がある」。「自由は法則に循つて働くしんずと雖も、然れども法則を支配して法則以上である」。

内村によれば「神は愛に因り義と法と力とを以て働き給ふと知つて、人生万事が調和せる発達を遂ぐるのである」。

キリストは完全なる神を世に示して、世を救ふの基礎を置き給ふたのである」。

四

内村においては、「神・人・自然」は「キリスト・人・自然」となる。内村においては、一方ではキリストに集中しながら、他方では人・自然と広がっていく。そこに内村の特色があり、どこまでもキリストによる救済に関心を集中しつつ、人と自然界の現実に深い洞察を向けることを可能としたのである。内村にキリスト中心の全体論(Holism)を見出す⁽¹⁾。その全体論とは創造から始まり、終末に終わる神の歴史と、それに「神・人・自然」が垂直に関わる。そして人(歴史)も自然もそれぞれの歩みをしながら、究極的には万物の完成の更新をめざしていく。そして終末は、預言という形で向こうから私たちに示される。そのとき自然界は預言を媒介するものとして用いられる。それは、自然の歴史化でもあった。つまり自然に救済論的な意味が付与されたといってもよいであろう。その意味で「神・自然」が人に対するのである。内村は「再臨が解つて天然が解つた」と言うが、以上のことが解つたと、解釈する。(未完)

註

(一) 本論は一九八三年九月十五日 今井館で開催された第六回内村鑑三研究会での発表の一部である。参考までに当日のレジメを次に記しておく。図は省略する。

I 今日の内村鑑三研究について

(イ) 無教会主義運動を継承しようとする立場からの内村研究

(ロ) 近代日本の社会思想史・文学史・科学史の立場か

らの内村研究

(ハ) 人間・内村鑑三に興味をもつ人々による内村研究

II 内村の「真理」観

- (イ) 「真理」とキリスト教との関係
- (ロ) 内村の主張する「真理」の特色
- (二) 真理を証明するもの

III 〈神・人・自然〉の三つの関わり方

- (イ) 神対人・人と自然
- (ロ) 〈神と人〉対自然
- (ハ) 〈神と自然〉対人

IV 神の人類救済方法

- (イ) 自然を媒介とする人類の救済
- (ロ) 自然を媒介としない人類の救済
- (ハ) 神の自由と愛

V 内村における〈神・人・自然〉

VI 内村における「自然と歴史」

(2) 〈神・人間・自然〉について考察している文献としては、荒井猷氏の「神と人間と自然」『荒井猷著作集』九 岩波書店 二〇〇二年がある。この論文は一九九四年六月に開催された日本学術会議主催の公開シンポジウムでの発題に手を入れられたものである。そのまとめで、荒井氏は次のように述べられている。

「旧約には、神・人間・自然の関係をめぐって二つのタイ

内村鑑三における「神・人・自然」(原島)

プが認められる。第一(A型)は、〈神・人間〉対〈自然〉という関係のタイプ。ここでは、神の像に従って造られた人間が自然の上位に立ち、神から自然を支配する権利が認められている。第二(B型)は、〈神〉対〈人間・自然〉という関係のタイプ。ここでは、人間が大地の塵(自然)から造られ、神の息を有し、塵に帰る。A型はP資料に、B型はJ資料に、それぞれ代表されるが、旧約——とくに第二イザヤと知恵文学——ではB型、しかも〈神〉対〈人間・自然〉という関係のタイプがA型よりも多い。新約、とくにイエスとパウロには、A型が前提されてはいるが、——それぞれの仕方では——B型への志向、さらにはB型における人間と自然の関係を逆転する傾向(↓〈神〉対〈自然人間〉)が認められる」。

荒井氏が述べられている「人間と自然との関係の逆転」は、〈神・自然〉対人間とは違う。神はどこまでも神であって自然とは異なる。けれども神が自然を通じて人を救うという意味で〈神・自然〉対人間を第三(C型)と考えられないであろうか。

なお、荒井氏のこの論文の註(8)で並木浩一氏が「旧約聖書の自然観」上智大学中世思想研究所編『古代の自然観』創文社、一九八九年で「神、人間、自然の三項の関わり」について述べておられるのを知ることができた。並木氏は次のように述べられている。

「旧約聖書の自然観においては、日月も大地母神たる大地も非神格化されており、自然はもはや直接的な宗教性を持たない。しかしそのことよって自然が人間の隷属者の位置に置かれてしまったわけではない。旧約聖書は間接的にはあるが、自然自体の存在の権利を明らかに認めている。《人間》が《神・自然》に差し向かうのではなく、自然が神との共同戦線を敷いて人間に対峙する」（二七〇頁）。さらに並木氏はヨブ記三十八章以下の「神の創造の業の不思議なカタログ的列挙」について次のように述べられている。

「神はその列挙で、被造物たる人間に自然考察の能力の限界を思い知らせようとする。神がこれほどまでに人間に反撃せねばならないほどに、《人間》対《神・自然》の思考パターンが人々に根づいたと言えよう」（二六八頁）。この《人間》対《神・自然》の思考パターンが内村の宗教思想に見られるのである。なお、内村の「ヨブ記」についての言及は、註（6）で紹介する。

(3) 「内村鑑三全集」一七巻、岩波書店（以下『全』一七と略す）一〇二頁〜一〇八頁。

(4) 『全』二九、二三九頁〜二四四頁。傍点は原文。以下の引用でも同じ。

(5) 内村鑑三における「理神論的傾向」について指摘した論文には、次のものがある。

川端伸典「内村鑑三の回心をめぐって」『日本の哲学』第

二号、昭和堂、二〇〇一年、一〇一頁。
内村と理神論との関係は重要である。

(6) 内村には「自然神学」がある。内村は「天然神学」と言う。内村の文章を引用しておこう。

「吾人もし神の知恵を知らんと欲せば知者哲人の教訓を待つに及ばず。天然そのものがこの事に関する吾人の最も善き説教者なり。野の獣と空の鳥と、地と海とその中にあるすべての物とは、神の全知を伝えてあますところなし。神の知恵にしてもし吾人の特に知らんと欲するところならんか、吾人はいわゆる『天然神学』をもつて満足すべし。されども吾人はさらに神の愛について知らんと欲す。ゆえに吾人は神の特種の黙示を要するなり。天然の研究はいかに深きに達するも、もつて吾人に臨む苦痛と死との説明を供するに足らざるなり（七一〇）」。『内村鑑三聖書注解全集』第四巻、教文館、一一一頁。

『日記』一九二〇年六月二〇日に「ヨブ記」第一章と第二章を講じたことについて次のように述べている。『全』三三、二五九頁〜二六〇頁。

「講演は約百記第十一、第十二の二章に涉り神智の探索に就てあつた、聖書を天然に結きりかへ附けて講じ、自分ながらに愉快であつた、

今謂ふ獸に問へ、然ば彼れ汝に教へん、
天空の鳥に問へ、然ば彼れ汝に語らん、

地に言へ、然ば彼れ汝に教へん、
海の魚もまた汝に述ぶべし、
是れ所謂「天然神学」である、天然を-throughして天然の神
に達せよとの教である、約百記は最古の天然神学である、
之を日本人に伝ふるは余の特別の天職である乎の如くに感
ずる」。

(7) 『全』三三、一七二頁〜一八三頁。

(8) 『全』二八、八九頁〜九一頁。
天然は「物を以てする神の表現」である。

Nature is material representation of God.

(9) 『全』二八、九一頁〜九四頁。

(10) 内村はスピノザを評価し、スピノザの哲学に同意する。
内村のスピノザ観は「ユダヤ人」観との関連で別に論じる
予定である。

(11) 『全』一九、二〇四頁〜二〇五頁。

なお以下については、「内村鑑三の運命観」『季刊日本思
想史』第三二号、ペリカン社、一九八九年で述べたことと
重複している。

(12) 『全』一九、七〇頁〜七一頁。

(13) 『全』一九、二〇三頁〜二〇四頁。

本論の結論は「斯くて天然の法則に循へば亡ぶべき者も、
亦社会の法則に循へば無能なる者も、亦倫理の法則に循へ
ば誼はるべき者も愛の法則に循て救はるゝなり」である。

内村鑑三における「神・人・自然」(原島)

(14) 『全』三〇、三〇九頁〜三一四頁。

(15) 内村に「全体論」(Holism)があることを指摘したのは、
泉治典氏である。